

# 「労務者渡世」賞

## 七六年度当選作

「労務者渡世」賞文芸作品参加記念1976年

### 労務者渡世

「労務者渡世」賞七六年度当選作（短歌）

おれ生きる値りちあるのかなアとアブレ雨の日しみじみ思う

死ぬことも生きることをも考えた生きるときめて地下足袋をはく

大阪 七瀬正士

日雇いの我をたずねる人はなし電車音のみ来ては遠のく

大阪 太郎

雨の日も仕事のありて働らきに行かるる人のけたるくもかな

今日の日を昔語りとなれる日の労務者が身にくるを待たれる

京都 芦田俊次

◎「けたるく」とは京都弁で、うらやましいの意味

連作「比呂志断腸歌集」抄

挫折せしにがきくるしき若き日よ傷口いまだ血を噴いてやまず

嗚呼母よ臨終の際に手を伸べぬ強く正しく誇らかに生きよと

阿保やなあと姉ため息つきぬ冬寒き日シヨールの姉の髪の匂いき

姉逝ゆきぬ虚空に向い言葉なくもし靈あらば我にこたえよと

夜学に通う幼き日々の吾たりしあの夕焼けをなつかしく想う

往き往きて果して何を唱わんか淀川べりの野の花に問え

大阪 比呂志



『労務者渡世』賞七六年度当選作（俳句）

稲妻に骸骨踊る大工事

東京 岩 太郎

秋風や日雇いおのれの影を堀る

和歌山 飯野 静 峰

寒や同僚笑うというも現場ばかり

京都 芦田 俊次

ケタ落ちの現金黙々年の暮れ

大阪 太郎

◎岩太郎さんの当選作は二句ですが一句は  
本号の扉のページにのせました。